Creativity

あなたにとって「クリエイティビティ」とは？

先端研在籍者に「あなたにとってクリエイティビティとは何ですか？」「クリエイティビティと聞いて思い浮かべるものは何ですか？」と聞いてみました。一言コメントあり、ご自身の活動あり、写真あり。一部をご紹介します。

異質なものをつなげる能力

西成 活裕 教授（数理創発システム分野）

不自然な自然と、非人為的な人為のあわい

檜山 敦 講師（身体情報学分野）

笑（わら）アート

コメディー、アート、超絶擬音の三位一体で、子供からお年寄りまで、すべての現代人のストレスをしこたま和らげる、アートプロジェクト。現代人が抱える心の曇りを「笑アート」で、ちょっぴり晴やかに、と立ち上げました。

#笑アート

栗原 穂香さん（大澤研究室 秘書）

偶然をとらえる視点

アーティスト・鈴木 康広 氏（中邑研究室 客員研究員）

「太陽のメモパッド」（西門の前）

鈴木さんのツイート

左上：「エリンギを選ぶ決め手は仲の良さ」
左下：「パンのくつ」（キャンパス内カフェ）

右上：「しずくの横顔」（1号館前の池）
右下：「落ち葉の手袋」（正門付近）

輝け！未来の先端人

研究の価値をビジュアルで伝える 生物医化学系ラボ専属のデザイナー

「すべてが面白くて、毎日わくわくしています。研究の役に立てることがうれしい。もっと研究をわかりやすく伝えるにはどうしたらいいかと私も日々研究中です」

安藤（あんどう） 律子（りつこ）さん　大澤研究室（ニュートリオミクス・腫瘍学分野）アートデザイナー

愛知県出身。名古屋大学文学部史学科卒業。旅行会社勤務後、渡米。ロサンゼルスの設計・都市デザイン会社The JERDE Partnershipで働きながら、UCLA Extensionでデザインを学ぶ。帰国後、インテリアデザイン事務所でのグラフィックデザイナーを経てフリーに。2018年11月より学術支援専門職員（短時間）として勤務。

先端研初・ラボ専属でサイエンスイラストレーションを描く。新しい栄養学の視点から新規がん治療法の開発を目指す大澤研究室で、安藤さんは生物・医学論文のグラフィックス全般を担当。無機質な模式図も安藤さんの手で作用が一目でわかる“生きた絵”になる。「研究内容を一枚の絵で一気に伝えられるかという勝負。それが私のやるべき仕事です」。サイエンスイラストレーションは、見る人の理解を助け、研究の価値を伝え、関心を持たせる。米国やカナダでは、サイエンスイラストレーター養成の専門コースを置く大学もある。一方、日本では大学などでの専門教育はなく、仕事自体がほとんど知られていない。

安藤さんがサイエンスイラストレーションという分野を知ったのは、米国。LAの設計会社でアシスタントをしていた安藤さんの絵を見た同僚の勧めで、UCLAのエクステンションセンターに通いデザインを学んだ。「その頃に出会ったのが、現在メディカルイラストレーターとして制作活動をしている主人でした。私はグラフィックデザインが専門ですが、いつも身近にサイエンスイラストレーションがあります」。帰国後はグラフィックデザイナーとして働き、フリーへ。昨年、知人の紹介で大澤研究室の秘書面接に行くも、他の人に決まったところだった。「大澤先生が面接用のポートフォリオを見て、『絵を描ける人を待っていた！』とおっしゃって。私も、是非！とお返事しました」。大澤毅特任准教授が留学した英国には専属のデザイナーがいるラボも数多くあった。今や医学系のラボに情報系の人が在籍するのは当たり前のように、サイエンスイラストレーターもラボにいるべきだと、大澤特任准教授は考えている。安藤さんの職名は学術支援専門職員だが、渡された名刺にはアートデザイナーとあった。安藤さんは「アートデザイナーのアートは、芸術というよりはむしろ専門技術という意味だと理解しています」と話す。

海外の研究発表のビジュアルは、日本よりはるかに高水準だという。現在は論文で使うイラストの外注も増えているが、やり取りに時間がかかる、高額の割に望む絵ができないなどの理由で、研究者や学生が慣れないソフトで作成する実情がある。フリー素材も欲しい絵を見つけるのは一苦労だ。「研究発表や資料の絵作りのために、貴重な研究時間を使ってほしくない。研究が実用化すれば、がんと闘う多くの人を助けられます。絵はその分野の者に任せればいい」。研究室にいる安藤さんは、研究内容や進行状況を把握しながら、この図のどこが重要かという意図を反映した絵を作ることができる。「知識のハンデはありますが、対象者や目的に合わせて理解しやすい見せ方を提案できます。大澤先生とは、学生向けのワークショップなどもできたら、と話しています。何より私自身、この職種がラボに必要だと認められる活動をしていきたいと思っています」。

編集後記

広報委員 高橋 哲 教授
（光製造科学分野）

今回の編集後記では、私の独断と偏見に満ち溢れたRCASTNEWSの楽しみ方を、大きなお世話と言われるのも構わず紹介したいと思います。まずは呼吸を整えて、表紙を眺めてみてください。読みたい気持ち、あせる心を落ち着かせて、ここは一旦、目を瞑ってみましょう。お疲れの方は、ここでうっかり寝ないように。深呼吸をして、さあ、いよいよです。伊藤節フェローの寄稿から開かれたその時間は、まさに先端研のあらゆる局面で生成されているクリエイティビティのエッセンスが詰め込まれた珠玉の玉手箱が、皆さんの脳内で弾け飛ぶまで、怒涛のごとく進むでしょう…。ここで再度、目を閉じてください。表紙を開ける前に脳に浮かんだ情景が、どのように変化したでしょうか。読者の皆様お一人おひとりの過去のご経験、感動、知的興味と記事が情緒深く相互作用し、個性あふれる情景が踊っていること、まさにクリエイティビティではないでしょうか。

東京大学先端科学技術研究センターについて

2017年に発足30周年を迎えた東京大学先端科学技術研究センター（略称：先端研）は、「科学と技術とアートのハーモニーでインクルーシブな社会を形にする」ことを使命とする研究所です。最大の特色は研究者や研究分野の多様性にあり、理工系の先端研究から社会科学やバリアフリーという未来の社会システムに関わる研究まで、基礎から応用に至る多様な研究を積極的に推進しています。

先端研ニュース 2020 Vol.1 通巻109号　発行日：2020年2月21日　ISSN 1880-540X

© 東京大学先端科学技術研究センター
転載希望のお問い合わせ press@rcast.u-tokyo.ac.jp

発行所：東京大学先端科学技術研究センター　〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1　https://www.rcast.u-tokyo.ac.jp
編集：広報委員会［中村尚（委員長）、岡田至崇、高橋哲、池内恵、ティクシエ三田アニエス、近藤武夫、谷内江望、セット ジイヨン、村山育子、山田東子］
表紙：伊藤節先端研フェローが日本人として初めてイタリアのMastro d'arte della Pietra / 石の芸術の匠賞を受賞した石庭「Stone Forest / 石の森」©Setsu&Shinobu ITO + RB Marmi

VEGETABLE OIL INK　この冊子は植物インキを使用しています。